

# ボードレールとポオ

—翻訳着手までの経過について—

岩 淵 邦 子

ボードレールがポオの短篇小説に魅了され、その翻訳にうちこんだことはよく知られている。ところで、ボードレールはいつどのようにしてポオの作品にめぐりあったのであろうか。そして、どのような過程を経てポオの世界の虜になっていったのであろうか。

クロード・ピシヨワによるボードレール年譜の1847年の項には、次のような記載が見られる。

1847 ... 27 janvier: Isabelle Meunier donne à *La Démocratie pacifique* une traduction du *Chat noire*. Selon Asselineau, premier biographe de Baudelaire, c'est le texte qui révéla Poe à son futur traducteur. <sup>(1)</sup>

(1847年…1月27日：イザベル・ムーニエが「黒猫」の翻訳を「平和民主主義」紙に発表する。ボードレールの最初の伝記作者であるアスリノーによれば、未来の翻訳家にポオを発見させたのはこの一文であった。)

上記文中に《…futur traducteur…》とあるのは勿論ボードレールのことである。ついで、ここで言及されている、ボードレールとポオの作品との出会いに関するアスリノーの証言は次の通りである。

Vers ce temps-là aussi, une curiosité nouvelle s'empara de l'esprit de Baudelaire et remplit sa vie. On devine que je veux parler d'Edgar Poë, qui lui fut révélé par les traductions de M<sup>me</sup> Adèle\*

Meunier, publiées en feuilletons dans les journaux. Dès les premières lectures il s'enflamma d'admiration pour ce génie inconnu qui affinait au sien par tant de rapports. J'ai peu vu de possessions aussi complètes, aussi rapides, aussi absolues. A tout venant, où qu'il se trouvât, dans la rue, au café, dans une imprimerie, le matin, le soir, il allait demandant: — Connaissez-vous Edgar Poë? Et, selon la réponse, il épanchait son enthousiasme, ou pressait de questionson auditeur.

\**Sic pour Isabelle. Sa traduction de *Chat noir* parut dans *La Démocratie Pacifique* le 27 janvier 1847.* (2)

(この頃また新しい好奇心がボードレールの精神を占領して彼の生活を充実させた。私がエドガー・ポオのことを話そうとしているのは誰にもお分かりであろう。彼は新聞の文芸欄に発表されたアデル・ムーニエ夫人の翻訳によってポオを知ったのである。初めて読んだ途端に彼は、多くの点で彼と相通じるところのあるこの未知の天才に逆せ上ってしまった。私はこれほどまでに完全な、迅速な、また絶対的な熱中ぶりを見たことがない。彼は往来であろうが、カフェであろうが、印刷所であろうが、至るところで、朝でも晩でも、誰かれかまわずに、『あなたはエドガー・ポオを御存じですか』と問いかけるのであった。そして、相手の返答次第で自分の熱狂ぶりをぶちまけたり、相手を質問責めにしたりするのだった。)(3)

更にこのあとアスリノーの証言は続き、ムーニエ夫人の翻訳によって初めて知り、かつそれがボードレールをしてポオの世界に開眼させるきっかけになったという、曰く付きのポオの短篇『黒猫』を彼は暗誦できるほど熟読していたこと、英米文学に通じている人がいると聞けば、ポオについて知りたいあまり、ボードレールは早速訪れ、その人を質問責めにせずにはおかなかったこと、又、ポオ研究にとりくむのに必要な文献を入手しようとして大いに苦勞していたこと、そして、やはりポオに関する情報を得たくて、ブルヴァール・デ・キャピュシヌの某ホテルに滞在していた、ポオと面識があるというアメリカの文学者に、ボードレールとアスリノーの二人で会いに行ったこと、ボードレールが、ポオを中傷するルーファス・グリズウォールドに腹を立てていたこと、又、英語に関しては、今日的

話題をすぐ理解したり、俗語的表現にも強くなるように、ボードレールは居酒屋の主人やカフェのギャルソンを先生に見たてて、語学力向上のために励んでいたこと等を、アスリノーは常にボードレールの身近にいた友人として一つまり信頼性の高い証人として次々と述べている。

ここで注目すべきことは、アスリノーが述べているこれらの事柄は、全て継起した一連のものであったという印象を伴っていることである。すなわち、アスリノーの上記の証言を読む者は誰でも、ボードレールがムーニエ夫人の翻訳になるポオの短篇を読んだことにひきつづいて、上述のことは全て次々と起ったのだという解釈に必然的に導かれざるを得ない。この傾向は、引用文中にある一節、「…初めて（ムーニエ夫人訳のポオの短篇を）読んだ途端に彼は…（中略）…この未知の天才に逆せ上ってしまった。私はこれほどまでに完全な、迅速な、また絶対的な熱中ぶりを見たことがない。…」によって一層強調される。

ところで、ボードレールとポオの作品との出会いに関して、筆者に最初の問題意識を抱かせるきっかけとなったのは、出口裕弘氏の《ボードレール》の次の一節であった。

革命流産後、ボードレールは間もなくエドガー・ポオに傾倒しはじめ、後にはジョゼフ・ド・メーストルを思想上の強力なプレテクストにしようとする。いずれも必死の作業だったにちがいない。ポオについて言えば、第一食ってゆくためにその翻訳は至上命令だったろう。ボードレールが生前出した本でポオの『意想外の物語』の翻訳ほど売れた本はないのである。(4)

この一文から分るように、出口氏は、ボードレールがポオに傾倒しはじめたのは「革命流産後」であったとしている。この「革命流産後」とはいつの時点を指すのであろうか。「革命」とはいうまでもなく、ボードレールがかなり深くかかわったといわれている1848年の二月革命のことである。この二月革命は、一時は成功したかに見えたのであるが、すぐさま、

革命戦線内部の階級対立が表面化するに至り、六月暴動を経て急速に政治の反動化が強まり、その後、第二共和国憲法の大統領に関する規定にのって正式に登場したルイ・ナポレオンが、1851年のクーデタにより第二共和政そのものを覆してしまった。<sup>(5)</sup> 「革命流産」<sup>(6)</sup>とはこの間の事情を意味している。この情勢の変化の中で、ボードレールはそれまでかなりかかわっていた政治活動から一切身を引いてしまったといわれている。その証となるのは、1852年3月5日付のアンセル氏宛ての手紙であり、この手紙の中に次の有名な一節が含まれている。

…LE 2 DÉCEMBRE m'a *physiquement dépolitiqué*, Il n'y a plus d'idées générales. Que tout Paris soit orléaniste, c'est un fait, mais cela ne me regarde pas. Si j'avais voté, je n'aurais pu voter que pour moi. Peut-être l'avenir appartient-il aux hommes *déclassés*?<sup>(8)</sup>

(12月2日が、私を肉体的に非政治化した。もう一般的な観念などというものの存在の余地はないのです。バリ全市民がオルレアン党であることは事実ですが、私のかかわり知るところではない。私が投票したとすれば、自分にしか投票できなかったでしょう。事によると未来は、落伍した人間のものとなるのではないか。<sup>(7)</sup>

以上のことから、「革命流産後」<sup>(6)</sup>とは1850年より後を意味するであろう。従って、出口氏の見解によれば、ボードレールがポオに傾倒しはじめたのは、1850年代に属することなのである。

初め筆者はこの説明に何の疑問も抱かなかった。なぜなら、二月革命の勃発を見た1848年前後、ボードレールはブルードンやピエール・デュポンをはじめ進歩的な人々との交友関係があり、この時期のボードレールに、反進歩、反民主主義を唱えるポオへの心酔が起り得たとは考えられなかったからである。ポオへの傾斜が、政治活動にひどい幻滅を味わった「革命流産後」<sup>(6)</sup>に位置することは必然的であるとさえ思われ、出口氏の説明に納得していた。

しかし、その後、ボードレールとポオの作品との出会いについて、ボードレールの親しい友人であったがゆえに、直接見たり聞いたりする立場にあり得た唯一の人であったアスリノーの証言を知るに及んで、出口氏の説明とアスリノーの証言は相容れないものを含んでいるのではないかと思うようになった。少くとも、ボードレール年譜の1847年の項の記載とアスリノーの証言をつなぎあわせ、1847年1月27日、新聞の文芸欄に発表されたイザベル・ムーニエの「黒猫」の翻訳がたちどころにボードレールを魅了したクとするならば…

アスリノーの証言と出口氏の見解とのくいちがいに興味を惹かれ種々調べた結果、事態は当初考えていたよりも複雑であり、研究者によって解釈も一様ではないことを知るに至った。

そこで、筆者なりにこの問題を整理して考えてみたいのであるが、諸疑問点を考察するにあたって、次の前提ともいべき事柄を確認しておきたい。

○ボードレールとポオの作品との出会いに関するアスリノーの証言は、興味深くかつ迫真性に富み、貴重なものであるが、何故か終始一貫して日付が明示されていない。アスリノーの証言が展開されていく中に、日時に関するヒントを得ようとしても、まず冒頭の、*Vers ce temps-là* に始まり、次いで各節には、*un soir*, *Dès lors*, *Au bout de quelques jours* 等の語句が見出されるだけであり、明確な日時を確定するに足る語句は一つも発見できないのである。しかも先に述べたように、個々の事柄の継起性が強調されており、たとえ実際には何らかの中断なり空白期間なりがあったとしてもそれを感じさせない。アスリノー証言の、この日時に関する不明確さが、研究者相互にいろいろ食い違った見解を抱かせる根本原因となっていると思われる。

○ボードレール年譜に明記されているように、1847年1月27日にイザベ

ル・ムーニエ訳の「黒猫」が、「平和民主主義」紙に掲載されたのは紛れもない事実である。又、ボードレールがこの「黒猫」の翻訳に強く惹きつけられたことも事実であろう。但し、ボードレールがこの「黒猫」の翻訳を実際に読んだ日時は不明である。すなわち、ボードレールは、ムーニエ夫人の翻訳が新聞に掲載されると同時にそれを読んだのか、あるいは、数日後、数週間後、数ヶ月後、数年後にそれを読んだのか必ずしも明確ではない。

但し、動かし難い事実として、やはりボードレール年譜に明記されているように、1848年7月15日、ボードレールが最初に試みたポオの翻訳、《Révélation magnétique (催眠術下の啓示)》が《La Liberté de penser》に掲載されたということを見落してはならない。すなわち、遅くとも1848年前半までには、ボードレールはポオの作品の存在を知っていたことになる。しかもその時すでに翻訳を試みようという気を起すほどにボードレールはポオに関心を抱いたことになる。まさにボードレールにあって、二月革命への参加、つまり革命への熱中とポオへの関心が同時に存在していたのかもしれない。そしてもしそうであるならば、ボードレールとポオの作品との出会いに関するアスリノーの証言の冒頭にある語句、《Vers ce temps-là》とは、1847年もしくは1848年を指すと考えるべきなのかもしれない。

○世間への発表という面からみたとき、ボードレールの初の翻訳《Révélation magnétique (催眠術下の啓示)》発表(=1848年7月15日)から、1852年の《ポオ論》及びポオの諸作品の一連の発表まで明らかに空白期間がある。この空白期間は何によってもたらされたのか考えてみたい。

さて、ボードレールとポオの作品との出会いに関して詳しく調べているのは、レオン・ルモニエとバンディの両研究者であろう。以下、上記した諸点について両者がどのような見解を述べているか調べてみよう。

## ボードレールがムーニエ夫人の翻訳になる

### 「黒猫」を読んだ時点について

ルモニエは、ボードレールとポオの作品との出会いについて次のように語っている。

Baudelaire a fixé lui-même, quelques années plus tard, la date de sa découverte. «En 1846 ou 1847, dit-il, j'eus connaissance de quelques fragments d'Edgar Poe». (8) Et Asselineau, le meilleur ami de Baudelaire, a confirmé ce témoignage; «Edgar Poe lui fut révélé par les traductions de M<sup>me</sup> Adèle (9) Meunier qui parurent en 1847 dans la *Démocratie Pacifique*». (10)

すなわちルモニエは、ボードレールとポオの出会いの時点についてまず第一に、ボードレール自身が述べた「1846年もしくは1847年」に信をおいている。ついで彼は、そのことはアスリノーの証言によって裏付けられるとしている。更にルモニエは、当時のボードレールの交友状況に言及して、その頃彼が左岸のキャフェに足繁く通い、社会主義者の作家や詩人達と親しくつきあっていたこと、それゆえ、ボードレールは、彼等の愛読紙ないし必読紙ともいふべきフリーエ主義の機関紙「平和民主主義(Démocratie Pacifique)」を欠かさず読んでいたであろうこと、従って、ムーニエ夫人のポオに関する最初の翻訳「黒猫」についても見逃すことなく読んでいたであろうとの推定を下している。

Il est donc probable qu'il lisait régulièrement la *Démocratie Pacifique*, et qu'ainsi le premier conte publié par M<sup>me</sup> Meunier ne lui échappa pas. (11)

ルモニエは、ボードレールとポオの作品との出会いについて、次のように、日付そのものまで確定してもよいとする。

D'autre part, si l'on observe que ce premier conte fut précisément ce *Chat Noir* qui fit une telle impression sur lui qu'il le savait presque par cœur, il est vraisemblable que l'on ne se trompera pas d'un jour en fixant au 27 janvier 1847 la date où Edgar Poe lui fut révélé. (12)

(それにもし、その最初の短編がまさに、殆んどそれを暗記してしまったという程、ボードレールに強烈な印象を与えたところの「黒猫」であったことに注目するならば、エドガー・ポオがボードレールに見出された日付を1847年1月27日だと断定しても、一日もまちがってはいないように思われる。)

一方、バンディはこの点に関して大いに慎重である。

バンディは、本格的にポオの作品の翻訳にとりくんだボードレールに先んじて、ポオの作品をフランスに紹介した人々について詳しく述べているが、彼等の内には、ボードレールの様に、ポオの秘めている偉大な価値に触れ、それに感銘を受けたのではなく、彼を単に奇抜な着想による、風変わりな作品を書く作家であると認識するだけで、ポオをまともに紹介するどころか、彼が当時フランスでは全く名前の知られていない作家であったのをよいことにして、ポオの奇抜なストーリーだけを無断で拝借し、自分の創作であるかのように偽って世に出すような人もあった。しかしイザベル・ムーニエは非常に正確でかつ良心的な翻訳者であったので、従来にない、忠実なよい出来ばえの翻訳をなしとげ、世に紹介することができたのであった。このため、彼女が翻訳したポオの作品は大好評を博し、いくつかの地方版にも再掲載されるに至ったという。

バンディによれば、イザベル・ムーニエは翻訳の際、原典として、その当時パリでも容易に入手できた、Wiley and Putnam という出版社のポオ作品集を用い、この作品集に含まれる短篇のうちから五つをとりだして翻訳したという。その中で最初に発表されたのが ≪Le Chat Noir≫ であり、最後に発表されたのが ≪Le Scarabée d'Or≫ であったという。後者は、「平和民主主義」紙に1848年の5月23, 25, 27日と三日にわけて掲載された。

これらのことをふまえた上でバンディは、ボードレールとポオの作品との出会いについて次のように慎重な判断を述べている。

It was probably this translation, or one of the four following ones, that provided Baudelaire with his first knowledge of Poe's writings. (13)

(ポオの作品について、ボードレールに最初の知識をもたらしたのは、おそらくこの翻訳(「黒猫」)か、もしくはそれに続く四つの作品の翻訳の内、いずれか一つであろう。)

バンディは、ボードレールとポオの作品との出会いの時点について、従来出されてきた諸説を一つ一つ詳しく紹介しかつ批判している。そして、そのように諸説併存する事態を惹き起した原因は、ポオの作品を初めて読んだとき激しい衝撃を受けたと述べている当のボードレール自身が、意外にもその事が起った日時についてはっきりした記憶をとどめていなかったことにあるとして残念がっている。

His ambiguity on this point is reflected in the divergent positions taken by his biographers, some of them maintaining that he discovered Poe in 1846, while others maintained that the year was 1847. (14)

(この点に関する彼の曖昧さが、彼の伝記作者達のいろいろ異なった立場に反映されている。ある人達は、彼が1846年にポオを見出したといい、又ある人達は、それは1847年のことだったと主張している。)

例えば、ボードレールの第一級の伝記作者であるユージェーヌ・クレペは1846年説をとっているが、バンディは詳細に根拠をあげてこれに反対している。

一方、バンディは、先述したルモニエの説にも、確かな根拠がないとの理由から反対している。

while it may be that Baudelaire read M<sup>m</sup> Meunier's translation of 'The Black Cat' on the very day of its publication, Lemonnier offers no proof that such was the case. (15)

(ボードレールは、「黒猫」のムーニエ夫人による翻訳を、まさにその発表の日に読んだかもしれないが、ルモニエは、そうであったという証拠は何も提出していない。)

バンディは、結局のところ1847年説をとっているのであるが、それは、1846年と1847年を並列している、もしかすると記憶が薄れてしまっているかもしれない1860年2月18日付の Armand Fraisse への手紙にではなく、より記憶の確かさに信のおける1854年3月17日付の Eugène Pellatan への手紙に根拠をおいてのことである。(16)

成程この手紙では、ボードレールとポオの作品との出会いの年として1847年のみがあげられている。

Depuis longtemps, depuis 1847, je m'occupe de la gloire d'un homme qui fut à la fois poète, savant et métaphysicien: il est tout cela même en restant romancier. C'est moi qui ai mis en branle la réputation d'Edgar Poe à Paris, ... (17)

(ずっと以前から、すなわち1847年から、私は同時に詩人であり学者でありかつ形而上学者であり、しかもなおその上に作家であったある人物の栄光の為に専念しています。パリでエドガー・ポオの名声をもりたてたのは私です。)

以上見てきたように、種々の見解はあるものの、ボードレールが1848年7月15日に、ポオの翻訳の最初のものである《Révélation magnétique (催眠術下の啓示)》を発表しているという動かし難い事実があるため、ボードレールとポオの作品との出会いの時点は、結局のところ1847年に落ちつくといつてよいであろう。

《Révélation magnétique (催眠術下の啓示)》についてバンディは、ボードレールも翻訳の原典として、当時パリの書店で容易に入手できた Wiley and Patnam という出版社の12の話を含むポオ短篇集を使ったの

だろうと推測している。

ボードレールは、ムーニエ夫人のポオの翻訳に感激してすぐさま書店に走り、自分でもポオの本を入手し、早速、その他の作品にも目を通したであろうというわけである。そしてボードレールはすぐその中の一つを翻訳してみたい欲望にとらわれた。この際、当然、ボードレールの英語の能力が問題になるのであるが、バンディは、ボードレールが当時すでに30頁ばかりの George Croly の 'The Young Enchanter' を翻訳した実績をもっていたことをあげ、《Mesmeric Revelation》の翻訳が可能な程度の英語の能力はもっていたのだと判断している。

His knowledge of English, while far from perfect, was good enough for the purpose. <sup>(18)</sup>

(彼の英語の知識は、完璧からは程遠くとも、目的のためには充分であった。)

ところでバンディは、ボードレールがポオの作品を初めて翻訳するに際して、何故、むしろ駄作に属する《Mesmeric Revelation》を選んだのかと不思議がっている。Wiley and Putnam のポオ短篇集には、未だ翻訳されていない優れた作品として、《The Man in the Crowd (群集の人)》や《The Fall of the House of Usher (アッシャー家の崩壊)》が残されていた筈だからである。

この点に関してバンディは次のように考えている。すなわち1838年、当時17才の学生であったボードレールは母親に宛てた手紙の中で催眠術のことを話題にしているが、この時分の催眠術に対する関心と興味がずっと後々に至るまで持続していたためであろうとしている。

The explanation of Baudelaire's choice is to be found, perhaps, in a letter, only recently published for the first time, that he wrote his mother in June 1838, when he was only seventeen years old. Even at that early age, Baudelaire was intrigued by what was

then called 'animal magnetism.' Apparently the subject still held its interest for him ten years later. (19)

ところで、ボードレールのポオの初めての翻訳《R v lation Magn tique》はせっかく世に出たのに、六月暴動によってひきおこされた社会的大混乱のために全く無視されてしまった。

Paris had just gone through some of the bloodiest days of the 1848 Revolution and the French public was too involved in political and economic problems to care much for fanciful treatises on mesmerism. Consequently, Baudelaire's translation attracted no attention whatever. (20)

(パリは1848年革命の最も血生臭い日々を通りぬけてきたばかりであった。そしてパリの民衆は政治経済問題に深く巻き込まれていて、メスメリズムに関する幻想に満ちた論文などに構っていられなかった。従ってボードレールの翻訳はいかなる関心といえどもひきつけることはなかった。)

バンディは、ボードレールがこの初めての翻訳につけた序文を重視している。ここにおいて初めてボードレールが公にポオについて語っているからである。

この序文でボードレールはポオを、独自の方法论と哲学志向をもった有能な作家達——ディドロ、ラクロ、ホフマン、ゲーテ、バルザック等——と同等にみなしている。ボードレールがポオにこのような高い位置づけを与えていることからみて、この段階ですでにポオへの傾倒が始まっていたと考えてもよいのではなかろうかと思われる。

## 空白期間について

ここで先に指摘しておいた空白期間が問題になる。バンディによれば、とりわけ1848年と1849年はボードレールの生涯の中でも最も情報に乏しい部分であるらしい。

The years 1848 and 1849 are perhaps the least known of Baudelaire's entire existence, at least of his adulthood. Few of the letters he wrote during this time have been preserved and those that have tell us little of his activities. (21)

全く世間からの反響なしに終わってしまったポオ作品の最初の翻訳《Révélation magnétique (催眠術下の啓示)》発表(1848年7月15日)から《エドガー・アラン・ポオ——その生涯と作品》及びポオの諸作品を発表するに至った1852年までのこの空白期間について一般にいわれていることは、ボードレールはこの間、ポオの作品を収集し、それに読みふけり、本格的にポオの翻訳にとりくむ準備として、英語の能力に磨きをかけていたのだということである。

このような見解の代表的なものとしてバンディは次の一文を紹介している。

From the time when (Baudelaire) first became acquainted with some fragments of Poe's work, in 1846, he haunted the English cafés, spent his time by preference with anyone who could speak English, from men of letters to coachmen and jockeys, besieged every American whom he could come at, for information on Poe, and, after four years of such preparation, began the translations to which he devoted the following fifteen years. (22)

これは、ボードレールがポオの作品の断片を知るやイギリス人のカフェに通い始め、そこで文学者は勿論、御者に至るまで、英語のできる人なら誰とでも同席したが、又、多少とも顔なじみになったアメリカ人については、ポオに関する情報を得ようとして、質問攻めにしてしまうというもので、これがアスリノーの証言に依拠していることは明白である。

この場合、当該論者は出発点(=ボードレールとポオの作品との出会い)を1846年に置き、それから四年を費して、つまり1850年までに本格的にポオの翻訳にとりくむための準備を完了したと見なしているわけである。

ポオの本格的翻訳を開始するまでに、ボードレールが四年かけて準備したという説明はアスリノーの証言そのものに見られる。

… cette traduction de Poë, qu'il prépara pendant quatre ans avant de commencer le manuscrit. Ces quatre années, il les employa à consulter, à s'enquérir, à se perfectionner dans la connaissance de la langue anglaise et à entrer dans une communication de plus en plus intime avec son auteur. (23)

河盛好蔵氏もこの種の見解に立っておられるようである。

二月革命から第二帝政成立に至るまでの五年間、ボードレールは、のちの『悪の華』の一部をなす詩篇を、業界雑誌、家庭雑誌、政治雑誌などに埋草のようにして掲載して貰ったほかに、エドガー・アラン・ポオの短篇の翻訳二つ、評論「エドガー・アラン・ポオその生涯と作品」を発表した以外には目立った仕事をしていないが、この期間は、彼が新しく発見したこのアメリカの詩人に夢中になっていた、彼の生涯でも最も重要な時期の一つなのである。(24)

バンディは、ボードレールによる最初のポオ作品翻訳発表にひき続く空白期間は、ポオの翻訳に本格的にとりくむための準備にあてられたと解釈する、これら通説への反論の第一弾として、*「誰もがアスリノーの有名な証言に先行する一節を読み落してきた」*ことを指摘する。

A point that has been overlooked by all those who have quoted this colorful passage is that it immediately follows a paragraph beginning with the words: 'je ne le rejoignis qu'en 1850...' A close reading of Asselineau's text shows that he saw nothing of Baudelaire between 1848 and 1850, so that the events he describes, as an eyewitness, must belong to a later period. Seen in this light, Asselineau's account, while perhaps a little over-dramatized, is for the most part entirely credible. (25)

(情景が目に浮ぶように生き活きと語られたこの箇所を引用した全ての人によって見落されてきたことは、それが、「私は1850年にしか彼(ボードレール)

と再会しませんでした。」という言葉で始まる段落のすぐ後に続いているということである。アスリノーの文を注意深く読むと、1848年から1850年の間、彼はボードレールについて何も見ていなかったということが明らかとなる。従って、彼が目撃者として書いている諸事実は、もっと後の時期に属する事柄の筈なのである。この見地からみると、アスリノーの記述は、多分幾らか大げさに脚色されているであろうが、大部分については完全に信用できるものである。）

先に見たように、バンディは、ボードレールとポオの作品との出会いに関して1847年説をとっている。しかし、アスリノーが1848年から1850年にかけてボードレールの傍におらず、現実目撃者たり得なかったという、従来誰もが見逃してきた事実をバンディは重大視し、アスリノーが、ボードレールのポオへの熱中ぶりについて語った全てのことは、アスリノーがボードレールとの再会を果たした1850年以降のことに属するのだとバンディは主張しているわけである。

つまりバンディは、アスリノー証言が我々に印象づける諸事実の継起性を否定したわけである。バンディの解釈の場合、成程、起点（＝ボードレールとポオの作品との出会い）は1847年に置く。しかし、ポオに夢中になったボードレールが行ったあれこれのことは、1850年代に属することだというわけである。

バンディの主張は、1848年7月15日発表のポオの初の翻訳《*Révélation magnétique*（催眠術下の啓示）》が革命の混乱の中であって全く無視されてから、ボードレールはポオへのとりくみに自ら空白期間を置いたということにある。

That Baudelaire suffered from a veritable Poe obsession during the early fifties, and even later, cannot be doubted. But, for some time after the great instant of discovery and the publication of 'Révélation magnétique,' his interest shifted elsewhere: to politics, perhaps to writing or revising his poems. (28)

（50年代の初期、及びその後もずっとボードレールが真にポオにとりつかれていたということは疑う余地がない。しかしポオ発見の偉大な瞬間と「催眠術下

の啓示」の発表のしばらくあと、彼の興味はどこかよそに移っていた。政治とか、おそらく詩作とか、詩の推敲とかいったことに。

そしてバンディは、ボードレールの関心が再びポオに向けられるそのきざしは、1851年10月15日付のパリの本屋にあてられた書籍注文の手紙だとする。それは次のようなものである。

À [?]

[Paris] Le 15 octobre 1851

Je suis allé plusieurs fois chez Amédée Pichot, et enfin on a daigné me dire qu'il n'était pas à Paris. Faites donc demander à Londres, au plus vite, ce livre si vous ne l'avez pas encore fait.

Œuvres d'Edgar Poe, et surtout l'édition à notice nécrologique, s'il y en a une.

Veuillez agréer mes respects

Charles Baudelaire<sup>(27)</sup>

(私は何度もアメデ・ピシヨの所に行きました。そしてやっとある人が私に言ってくれました。「彼はもうパリに居ません。」と。ですからもしあなたがそれをまだやってくれていないなら、大急ぎでこの本をロンドンに注文して下さい。

ポオ全集、もしありましたら、とりわけ死者略伝を含む版のものを。)

後略

この手紙が書かれた時点では、唯一種類の全集しか出ていなかったとバンディはいう。それはレッドフィールド版の全集である。このことは、ブレイアド版のボードレールの *Correspondance I* (1832—1860) に含まれる、1851年10月15日付の手紙に関する註の中でも述べられている通りである。

Baudelaire avait donc, à cette date, entendu parler de l'édition Redfield des œuvres de Poe, qui contient une telle notice.<sup>(28)</sup>

(ボードレールは従ってこの日までに、レッドフィールド版のそのような略伝を含むポオ全集のことを耳にしていたのである。)

先述したように、1848年7月の最初の翻訳《R v lation magn tique (催眠術下の啓示)》発表から、1852年《エドガー・アラン・ポオ――その生涯と作品》と題するポオ論発表までの空白期間中に、ボードレールはポオの作品を収集し、それに読みふけり、翻訳に本格的に取り組むために英語の能力に磨きをかけていたのだとする解釈は一般的であり、この解釈は当然のことながら、ボードレールが早くからポオの全作品を入手し、それに目を通すことができていたということを前提にしているであろう。しかしバンディによれば、ボードレールがポオの全集を入手した時期は実は非常に遅かったのである。

ポオを発見した最初の興奮のあと、しばらくボードレールの関心が他所に移っていたとするバンディによれば、ボードレールがポオ全集の入手のために実際に動き出したのは、上記した、本屋へのポオ全集発注の手紙からみて1851年のことだというわけである。

しかも、ボードレールが目当てのレッドフィールド版全集(全三巻)(この全集は、1850年1月、ニューヨークで第一、第二巻が発刊され、第三巻は同年12月に発刊されたという)をやっと入手できたのは、バンディの推測に従えば1852年12月～1853年1月だということになる。その時期に至るまで、ボードレールはレッドフィールド版のポオ全集を、買うことも借りることもできなかったのである。

そこでボードレールは、ポオ全集入手のために力になってくれる人を得たいと思い、パリに住むアメリカ人を探し出すことに努力した。そうして運よく探し当てたのが、パリで通信員をしていたアメリカのジャーナリスト、William Wilberforce Mannであったとバンディは言う。

Mannは職業柄、アメリカの数種類の新聞を整理して保存していた。そして幸いにもその中に、ヴァージニア州リッチモンドの Southern Literary Messenger も含まれており、ちょうどポオ自身が編集に当たっていた頃の分(1835年～1837年)と、ポオが死亡した頃のことを知る手がかりになる分(1849、1850年)をボードレールは見せてもらうことができた

いう。

バンディは、ボードレールの1852年のポオ論、《Edgar Allan Poe: sa vie et ses ouvrages》（これは、Revue de ParisのNo.6（1852年3月）、No.7（1852年4月）に二回に分けて掲載された）は、ボードレールのポオへの関心が再燃し、本格的な翻訳に再度取り組むにあたってのプレリュードに相当するものとみなしているのであるが、ボードレールが死者略伝を含むレッドフィールド版の全集を、1852年12月～1853年1月にやっと入手できたにすぎないとするため、ポオの生涯と作品を語るにあたってボードレールが依拠し得たのは、Mannの新聞のコレクションに含まれていたSouthern Literary Messengerの、とりわけ1849年分に見出したThompsonによるポオ追悼の記事、及び1850年分に見出したJohn Moncure Danielのよくまとめられた、ポオに関する研究論文のみであったとする。

しかも、それら追悼記事及び研究論文に対するボードレールの依拠の仕方は、論文の構成のあり方から、取り扱う題材に至るまで、文字通り全面的な依拠であり、ボードレールは、独自に資料に当てポオ論を書いたというより、ポオに対する好ましい評価につながらないや彼が判断したものは全て故意に取り上げなかったものの、Danielの論文の翻訳の域を殆んど出していなかった、という重大な指摘をバンディは行っている。

それならば、この1852年のポオ論においてボードレールの独創といえるものは何か。これについてバンディは次のように語っている。

In short, practically the only criticism in Baudelaire's essay that could be termed original is that which concerns eight of Poe's tales; the rest is lifted bodily from Daniel's review in the *Southern Literary Messenger*, in a few instances, from Thompson's obituary notice. (29)

（要するに、実際にボードレールのエッセーの中で、独創的と言い得る唯一の批評とは、ポオの話のうち八つの話に関するものだけである。残りは、サザン・リテラリー・メッセンジャーにのったダニエルの見解、及び、二、三の例に

についてはトムプソンの追悼記事から丸ごと盗用されているのである。)

ボードレールがこのように如何わしいとも言える行為に走ったことの理由としてバンディは次のように述べている。

The only reasonable explanation for this wholesale borrowing is that, in 1852, Baudelaire had a firsthand acquaintance with only a very small part of Poe's writings. Among the major works he had almost certainly not laid eyes on were 'The Raven' (and most of Poe's other poems), *Arthur Gordon Pym*, *Eureka* and, still more important, the critical essays on poetry and aesthetics, including 'The Philosophy of Composition.'<sup>(30)</sup>

(この丸ごととの借用についての唯一つ道理ある説明とは、1852年においては、ボードレールはポオの書いたもののほんの一部分をしか実際に読めていなかったということである。彼が殆んど明らかに目を通していなかった主要作品の中には、「大鴉」(そしてポオの詩の大部分)、「アーサー・ゴードン・ピム」「ユークリカ」、そして更に重要なことは、「構成の原理」も含めて、詩や美学に関する批評的エッセイなどがあった。)

更にボードレールをあれほどにも怒らせた Griswold への言及が1852年のポオ論に全く見出せないのは、全く単純な理由によるものであり、それは1852年のポオ論を準備した段階ではボードレールはまだレッドフィールド版の全集を入手できておらず、従ってポオ全集の第三巻におさめられている Griswold の論文を見ることがなかったからであるとバンディは述べている。

ところで、アスリノーの証言には次の一節がみえる。

Au bout de quelques jours, je fus au courant de ses griefs contre M. Rufus Griswold, le détracteur de Poë, et ses sympathies pour Willis et pour M<sup>ss</sup> Cleems [sic], son apologiste et son ange gardien. <sup>(31)</sup>

(それから二、三日してぼくはポオの中傷者であるルーファス・グリズウォールドに対する彼の不満と、ポオの擁護者であるウィリスや守護天使であるクリ

ームス夫人に対する彼の共感について教えられた。)

この一節は、上述したことから、ボードレールがレッドフィールド版のポオ全集を入手した時点（1852年12月～1853年1月）を確実に経過していなければ、アスリノーといえども絶対に言えないことであるとするなら、アスリノーの証言を1850年より後に位置づけなければならないとするバンディの見解は妥当なものに思われる。

バンディは、やはりアスリノーの証言にみえる、ポオに面識があるという事で早速ボードレールが面会を求めてたずねていった、キャピュシーヌ街のホテルに泊っていたアメリカ人とは、1854年の夏にヨーロッパを旅行し、パリも例の Mann によって案内してもらったことのある John Reuben Thompson その人ではないかと想像している。<sup>(32)</sup>

バンディは結論において、彼の詳細な研究は、ボードレールの不名誉な盗作としかいえない行為を暴露するために行ったのではなく、1850年までに大部分の詩を書き終えてしまっていたボードレールは、ポオの全集をやっと1852年末～1853年初頭に入手できただけなのであるから、ポオから一般に言われる程の影響は、少なくとも詩については受けていなかったことを事実に基づいて証明したいがためであったと述べている。<sup>(33)</sup>

具体的な資料に裏付けられたバンディの論の展開は非常に説得力がある。バンディは、多くの研究者が絶対視しがちなアスリノーの証言を全面的に正しいものとは受けとめてはおらず、多少とも諸事実の混同や記憶違いが含まれているかもしれないと見ている。

バンディの見解を要約してみると、彼は、ボードレールとポオの作品との出会いの時を1847年とするものの、1848年の最初のポオの翻訳発表の後、空白期間があったとし、しかもその空白期間を、ポオの作品を本格的に翻訳するための準備期間と見ることなく、そのままボードレールの関心がポオを放れ他事に移っていた期間としてとらえ、ボードレールの関心が本格

的に再度ポオに向ったのは1850年よりあとのこととしている。

ボードレールがレッドフィールド版の全集を、40年代はおろか、1852年に最初のポオ論を書いた時点においても入手できていなかったとするバンディの説は最低限受け入れなければならないことであろう。

すると、1847年にポオの作品を翻訳で読み<sup>〇</sup>途<sup>〇</sup>端<sup>〇</sup>に彼にのぼせあがり、本格的にポオの作品の翻訳をしなければならないと決意し、これを実現するべく、英語の能力に磨きをかけるなどして四年間も準備にあてたと一般に言われているものの、肝心の読むべきポオの作品は実はちっぽけな短篇集をのぞいては他になく、ボードレールとしては準備したくても、手も足も出なかったというのが真相だったということになるのではなからうか。

又、ボードレールの英語修得の着眼点は独特であり、カフェのギャルソン相手に、日常語、時事語、卑俗ないいまわし等を熱心に学んだとアスリノーが述べているが、語学修得にあたって、このような実地的な観点が生ずるのは、翻訳の作業にとりかかってみて、実際にその必要に迫られてこそそのことではないだろうか。しかも、バンディが論証したように、ボードレールはすでに1848年の段階で一通りの翻訳をするのに役立つだけの英語の能力はもっていたのであるから、一般に言われているように、四年もかけて英語力を磨いていたとは想像し難い。まさにバンディの言うように、その間ボードレールは政治活動とか自作の詩の仕上げとかに励んでいたと考える方が妥当なように思われる。

1850年代に入り、革命のなりゆきに愛想が尽きてボードレールは政治ときっぱり縁を切り、新たな思いでポオに向ったのであろう。そしてポオの死後（ポオは1849年10月7日、バルチモアで没した）、待望の全集が出版され、苦勞してそれを入手した後、それを原典として大車輪で翻訳作業に突入したのではないだろうか。伝えられる、集中した激しい仕事ぶりがそれを裏付けているように思われる。

ポオの翻訳に本格的に取り組むにあたって、事前に三、四年かけて語学力増強に力点を置いて準備したとは、一見いかにも周到な解釈ではあるが、

肝心の読むべきポオの作品が手元になくしてはどうしようもないであろう。従って、1848年の最初の翻訳発表から1852年のポオ論発表までの空白期間は一般に言われているような意味での準備期間ではなく、ポオの作品が入手できないがゆえのやむを得ない関心の中断であっただろう。1852年、ボードレールは心もとない英語の実力のまま実際の翻訳作業に決意も新たに突入した。実際、具体的な表現の訳出に困ってこそ、カフェのギャルソンも貴重な知識を有する英語の先生に見えてくるというものであろう。

以上、バンディの論の展開を追うことになったが、おわりにレオン・ルモニエの見解の特徴を整理しておきたい。

ルモニエは、アスリノーの証言、とりわけボードレールの性格的特徴に関する証言を重視してあつめ、それを材料にしてボードレールの人物像を浮び上がらせようとする。

ルモニエの提示するボードレールの人物像は次のようなものである。

興味を惹くものに出会うとすぐさま熱中し、目立つ存在になるためにはどんなことでも敢えてする、強すぎる香料のように、ある人は魅了しても別のある人には猛烈な反発と嫌悪感を与える、自分の価値判断力に絶大な自信を持ち、暴君的に自分の見解を他人に押し付けて憚らない自信過剰の男である。

ルモニエは、このボードレールの人となり、ボードレール自身が熱愛してやまないポオをフランスに紹介し、全フランスにポオを認めさせようとする目論見を実現するにあたって、遺憾なく発揮されたと説明している。

自分の価値判断に絶大な自信を有するボードレールは、アメリカ本国でポオが低い評価しか与えられていないことは十分知りながら、その事実を気にも留めない。それほどボードレールは当時のアメリカを文化的に低いものとして見下していたのかもしれない。

ポオを自分の神とするほどまでにポオに打ち込んだボードレールは、早速、友人知人にポオの真価を知らせようと動きだすが、ポオを知る人が単

に彼の友人知人の域にとどまっているのでは満足できなかった。ボードレールは、〴〵全フランスの賞賛をポオにもたらしてやるためには、自分自身がポオについて解説し、ポオの作品を自分の手で翻訳して紹介しなければならない〴〵と気付き、早速翻訳に取り組むことになる。

その第一作が1848年に発表した《R v lation magn tique (催眠術下の啓示)》であった。しかしこれは、六月暴動の流血惨事の衝撃から立ち上れないでいた当時の人々の興味を惹きつけることは全くできなかった。しかしボードレールはこれに挫けず、1852年にポオについて長い記事を書き、ポオをフランス全土に知らせるキャンペーンを成功させる第一の里標を超えることができた。

以上がルモニエの見解であるが、彼は、1848年7月以降、1852年のポオ論発表までの空白期間が何故生じたか、については全く言及しないので、我々としては、経過説明がすっぽり抜け落ちてしまっている気がする。又、ポオの全集入手の困難さと入手時期についての説明も正確さに欠けているように思われる。

1852年のポオ論についても、ルモニエは、これが大部分、アメリカ人の書いた記事や論文の借用でなりたっていることにも全くふれていない。更に、1852年のポオ論と1856年のポオ論との異同についても正しいところをついていないようである。

ルモニエの見解は、ボードレールの性格分析が入念になされていて、その性格的特徴が、ボードレールが企てたポオ・キャンペーンにどう反映したのか、という点では説得力に富んでいるが、事実関係については、上に述べたような不明な点がいろいろ指摘できる。

ルモニエの、フランスへのポオ移入に関する主要論文は1928、9年に出版されており、ルモニエが発見できなかった事実関係を明確につきとめたのが、1950年代及び60年代に主要論文を発表したバンディであったということが出来るであろう。

注

- (1) Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, t. I, *Chronologie* pp. xxxv-xxxvi
- (2) *Baudelaire et Asselineau*, éd. par J. Crépet et Cl. Pichois, Paris: Nizet 1953, pp. 93-94
- (3) 当該箇所のと訳は次のものを借用した。  
河盛好蔵「パリの憂愁—ボードレールとその時代」河出書房新社, 1978年, 185-186頁
- (4) 出口裕弘「ボードレール」紀伊国屋書店, 1968年, 99頁
- (5) この項については次のものを参考にした。井上幸治編「フランス史(新版)」山川出版, 昭和43年, 〆第七章 二月革命と第二帝政〆
- (6) Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, t. I, p. 188
- (7) 当該箇所のと訳は次のものを借用した。  
福永武彦編集「ボードレール全集Ⅱ」人文書院, 1978年, 所収〆書簡〆  
なお、筆者は、終りの文章については、若桑氏の論文、「サルトルのボードレール論」にある次の解釈の方がよいと思う；「多分やがて未来には、階級離脱者たちの時勢がやって来ることもあるだろうか。」
- (8) *Lettre à Armand Fraisse*,  
原文の註には、この手紙の日付について、s. d. 1858 としてあるが、調べてみると、この一節が含まれている手紙の日付は正しくは1860年2月18日である。
- (9) ムーニエ夫人の prénom は Adèle ではなく Isabelle が正しい。
- (10) Asselineau, *Ch. Baudelaire, sa vie et son œuvre*, Paris: Lemerre 1869 p. 39
- (11) Edgar Poe, *Histoires extraordinaires*, traduction de Baudelaire, édition de L. Lemonnier, Garnier, «Classiques Garnier», Bourges, 1973, «Introduction», p. iv
- (12) Ibid.
- (13) Baudelaire, *Edgar Allan Poe; sa vie et ses ouvrages*, introduction de W. T. Bandy, Toronto and Buffalo, University of Toronto Press, 1973, «Introduction», p. xv
- (14) Ibid. p. xvi
- (15) Ibid. p. xviii
- (16) Ibid. p. xviii

- (17) Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, t. I, p. 273
- (18) Baudelaire, *Edgar Allan Poe; sa vie et ses ouvrages*, University of Toronto press, 1973, «Introduction» p. xx
- (19) Ibid.
- (20) Ibid.
- (21) Ibid. p. xxii
- (22) Ibid. p. xxiii (Curtis Hidden Page, 'Poe in France,' *The Nation* (New York), Lxxx-viii (14, Jan. 1909) p. 32)
- (23) Asselineau, *Baudelaire et Asselineau* ed. by J. Crépet et Cl. Pichois, Paris. Nizet 1953, p. 101
- (24) 河盛好蔵「パリの憂愁—ボードレールとその時代」1978年, 河出書房新社, 185頁
- (25) Baudelaire, *Edger Allan Poe; sa vie et ses ouvrages*, University of Toronto Press, 1973, «Introduction» p. xxiii
- (26) Ibid.
- (27) Baudelaire, *Correspondance*, texte établi, présenté et annoté par Claude Pichois, Gallimard, «Bibliothèque de la Pléiade», 1973, t. I, p. 179
- (28) Ibid. Notes et variantes p. 802
- (29) Baudelaire, *Edgar Allan Poe; sa vie et ses ouvrages*, University of Toronto Press, 1973, «Introduction» p. xxxiii
- (30) Ibid.
- (31) Asselineau, *Baudelaire et Asselineau* éd. par J. Crépet et Cl. Pichois, Paris, Nizet 1953, p. 95
- (32) Baudelaire, *Edgar Allan Poe; sa vie et ses ouvrages*, University of Toronto Press, 1973, «Introduction» pp. xxxv-xxxvi
- (33) Ibid. p. xli